

第2回 第2期横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会

- 日時：平成22年12月2日（木）
午前10時から11時30分まで
- 場所：松村ビル別館 201会議室

■次 第■

1 開 会 (10:00~10:05)

健康福祉局福祉保健課長あいさつ

2 報 告 (10:05~10:10)

事例収集の実施結果について（ヒアリング実施結果等）＜資料1、資料2、資料2－別添1＞

3 議 事 (10:10~11:30)

(1) ヒント集のまとめ方（案）について＜資料3＞

(2) 人材の発掘・育成のためのヒント（中間案）について＜資料4＞

ア 人材の発掘について

イ 人材の育成について

4 その他

添付資料

- ・ (資料1) ヒアリング先一覧表
- ・ (資料2) ヒアリング項目ごとの共通点 (案)
- ・ (資料2-別添1) 【参考】ヒアリング項目ごとの回答集 (ヒアリング結果から)
- ・ (資料3) 分科会 ヒント集のまとめ方 (案)
- ・ (資料4) 幅広い人材を発掘・育成するためのヒント (中間案)

ヒアリング先一覧表

ヒアリング対象（団体）	活動拠点区	分野	紹介者（敬称略）
仲手原マザークラブ	港北区	自治会活動（町内会婦人部）	井上 禮子
湘南桂台地区	栄区	老人会、自治会活動	竹谷 康生
NPO法人 あいあい	港北区	障害児親子・兄弟の支援（託児等）	斉藤 保
泉区下和泉住宅自治会	泉区	自治会活動（送迎等）	打合せの場で案として出る
家庭教育学級ぱんぷきん運営委員会（NPO法人 横浜市民アクト）	磯子区	子育て	吉弘 初枝
さわやか港南	港南区	高齢者の在宅支援、託児の子育て支援等有償サービス、青年学級、障害者・高齢者の地域の居場所等	黒津 貴聖
「脳イキイキ教室」サポーターの会	中区	高齢者	柴田 眞紀
NPO法人 5つのパン	都筑区	精神障害者ホームヘルプ事業、地域活動支援センター事業（コミュニティカフェ）	斉藤 保
ヒアリング対象（分科会委員）（敬称略）	活動拠点区	所属	
斉藤 保	港南区	㈱イータウン、港南タウンカフェ	
柴田 眞紀	中区	本牧原地域ケアプラザ地域活動交流事業コーディネーター	
白岩 正明	旭区	旭区若葉台地区社協会長	
中野 しずよ	瀬谷区	特定非営利活動法人 市民セクターよこはま理事長	
山田 美智子	西区	よこはま一万人子育てフォーラム	

※参考資料（既存の冊子等）

既存の冊子（事例集等）	発行元
国民生活白書	内閣府
ふれあいの居場所－ガイドブック－	公益財団法人さわやか福祉財団
新しい風をつくる地縁型組織とテーマ型組織の協働ヒント集	市民セクターよこはま・横浜市健康福祉局福祉保健課
サロン活動ヒント集	南区社会福祉協議会
人がつながり地域が活きる 横浜市地域ケアプラザ地域活動交流事例集	市民セクターよこはま・横浜市健康福祉局福祉保健課

ヒアリング項目ごとの共通点(案)

① 活動の立ち上げ、または参加のきっかけ

★キーワード：仲間づくり、共有する場面・場・会議等

- 地域の問題に直面したこと・現状を見直す機会があったこと
- 問題意識を共有する場があること
- 声をあげて中心となる仲間をつくること（一人では難しい）
- 地域のニーズを把握すること

※ヒアリングで出た意見

- ・現状の地域の仕組みでは解決できない問題に直面し、見直さざるを得なかった。
- ・10年後の地域の現状等を想定する中で、何か取組が必要ではないかと感じた。
- ・既存でつながりのあった仲間5名で立ち上げた。
- ・介護保険事業者で見られるのは高齢者だけだが、地域には様々な人がいて、様々なニーズがある。だからこそ、助け合いにこだわり、柔軟に対応できるよう、任意団体として活動を展開することとなった。
- ・PTAで仲間になった人に自分の思いを話してみたら、共感する人が何人もいた。また、「子育て」に関心のある人に声かけをした。
- ・自治会長からの呼びかけで自治会の助け合い活動をはじめ、それが有償ボランティア活動に発展した。
- ・平成15年、当時の区長が子育て支援の強化を考えたことに伴い、区サービス課こども家庭支援担当が中心となり、2歳児の子育て中の保護者に対する実態調査を行った。

② 立ち上げ費用、運営費用の調達工夫

★キーワード：財源確保・財源活用

- 自主財源の確保（バザー、サービス利用料金、会費等の収入）
- 自主財源+助成金の確保（助成金の活用術、メリット）
- サービスの有償、無償のメリット・デメリットを十分に理解し、地域性や団体の理念にあった方法を選択すること
- 助成金に頼らずに安定的な財源確保に向けて必要なことは、周囲の理解や住民・関係機関の協力
- 自己負担を考えるのではなく、自宅の不要物を売ったり、ボランティア活動で費用を得る等、捻出方法を検討すること

※ヒアリングで出た意見

- ・地元観光会社と契約して小型バスを地域で走らせている。地域の企業の好意や、自治会会員から募金で基金を設けることで契約運行にこぎつけた。現在は利用者が増え、採算ラインを確保している。
- ・自分の家の不要物をバザー等で売り、資金を確保するところから始めた。現在も財源はバザーや夏祭りの夜店等が中心。
- ・会費等で足りない部分については、ボランティア活動等で得た費用で捻出。
- ・助成金、利用料金、会員の年会費、バザー等の収入で賄っている。
- ・民生委員の知人の文房具店から消耗品等を安価で購入し、活用している。
- ・活動の場として自宅を活用している。（費用の削減という意味で）

③ 活動に継続的に参加している人がいる(増えている)理由、秘訣

★キーワード：参加のきっかけづくり、情報発信・情報収集等

- 参加がしやすくなるきっかけを仕掛けること
- 参加者の主体性や気持ちを柔軟に受け止め、活動につなげること(コーディネート機能が必要)。
参加者の立場に立って活動を進めること
- 活動について、まず地域住民の4割の認知度を目指すこと
- 活動のPRを効果的に行うこと(イベントや情報誌、チラシの活用等)
- ある程度的人数(5人程度)を、立ち上げの段階で集めること
- 情報に敏感であること(転入者や、リタイアした人の情報等)

※ヒアリングで出た意見

- ・高齢者の外出支援活動を地域で行っている。運転や添乗は責任があるし、押しつけはできない。何かあったときには皆で支え、「仲間がいる」という実感を持ってもらい、不安を解消してあげること
- ・1人2人から増えていくのは難しい。最低でも立ち上げの段階で5人ぐらいいることが望ましい。
- ・会社勤めを終え、「何かやりたい」という噂を聞きつけ、声かけする。口コミ。
- ・転入者に対し、ウェルカムミーティングを実施。自治会に入るメリットを説明する場を設ける。
- ・ちょっとした仕掛け(「老人クラブ」という名前を「シニアクラブ」に変える 等)を考える。
- ・活動したいという人に、どんなことができるか(得意分野は何かなど)聞いておく。参加者の主体性を大切にしている。
- ・会員でないと利用できないという決まりはない。利用してみて自然に登録するようになる。活動者にも、活動を見てもらい、そのうち参加につながることが多い。利用者・活動者の気持ちを柔軟に受け止めて、つなげるという過程をゆるやかにやっていくことがポイント。活動者・利用者にとって参加・利用のハードルが高くないようにしている。
- ・住民の中で4割の人々が活動を認識し始めると、参加率が高くなってくる。
- ・区民活動支援センターのランチとして活動している。センターの外(入り口前)に掲示板とチラシラックを設置し、区内の市民活動・生涯学習団体の情報の他、福祉、子育てといった行政発行のもの、地域発行の情報誌などを配布。外の掲示物を見てセンターの中に立ち寄る方も増加している。
- ・参加を希望する担い手が、自分の都合や興味・関心に合わせ、特技や経験等をいかすことができるよう柔軟に活動している。
- ・自分ができる範囲での活動としている。
- ・活動の受け手から感謝の気持ちが伝えられ、担い手のやりがい(達成感、満足感)につながっている。
- ・サロンに参加しているお母さんの口コミにより、新たな参加者が途切れることなくやってくる。
- ・ある活動に参加している人に声をかけ、他の活動にもつなげる。
- ・民生委員や体育指導員など、地域のキーパーソンにさりげなく語りかけることによって、会員に登録する方が増えている。
- ・誰がきても、「あの人だれ?」という目で見ない。

④ うまく活動が継続している理由、秘訣

★キーワード：参加者への配慮

- 参加者にとって、活動の効果が明確に見えること
- 情報発信の徹底
- 参加者の声に耳を傾けること
- 参加者の可能性を考慮し、活動の広がりを視野に入れること
- 非協力的な人との付き合い方を考えること

※ヒアリングで出た意見

- ・ 定例会など話し合いの場をもち、活動者の悩みや意見を聞き、活動に反映させる体制をつくる。
- ・ 運営体系の整備がなされている（保険の整備や複数対応など）。
- ・ 活動者の持つ能力を引き出し、活用してもらおう働きかけをすることで、活動者のやりがいにつながる。
- ・ 活動の中で知り合った人とのつながりができるようになり、それがうれしくてやっている。収入がほしくてやっているわけではない。
- ・ 効果が明確に見えることでやりがいを持つ。
- ・ 自治会ニュース等を通して逐一活動の報告をすることで、地域住民からも賛同を得やすくなり、活動もしやすくなる。
- ・ 多数決はしない。じっくり話し合い、全員一致を目指す。
- ・ 自治会館が立地等の面で便利なので、活動する上で有効活用されている。
- ・ 参加者の都合を考え、会合の開催日等をフレキシブルにしている。
- ・ 外のボランティア活動に参加してきた人の愚痴を聞いたり、ちょっとしたことでも「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えたり、参加者へのフォローに努めている。
- ・ 自治会の任期が2年。任期を終えたときに、別の役割を与えることで、活動が広がる。
- ・ 頑張る人ばかりに負担がかからない工夫をしている。
- ・ 人や活動などの、様々な情報にアンテナをはる。活用する。
- ・ 時には非協力的な人もいる。そういった人々もうまく受け入れるよう努力する。
- ・ 10年後の姿を想像して、既存の福祉サービスではまかないきれないところをどのようにサポートしていくか考え、仕組みづくりをしていく必要があると考えている。
- ・ 活動を担う人が活動に参加するにあたって、その自発性が尊重されている。
- ・ 活動場所にテレビは置かない。
- ・ 自治会館を使用しているので、会場は誰もが知っており集まりやすい。
- ・ 活動内容を発表する機会を設けている（参加者の張り合いになっている）。

⑤活動継続にあたって自慢できること

★キーワード：自由・自主性、地域への想い

- 参加者の自主性、連携等
- 活動に自由さがあること
- 自分の住む地域に対する想い

※ヒアリングで出た意見

- ・ある程度の「自由さ」があること。
- ・迅速に柔軟に対応できる体制があること。
- ・リーダーの存在とリーダーを支えてくれる人々がいること。
- ・悪口の出ない雰囲気。活動は自主性・自発性。メンバーが「お互い様」の精神で活動している。
- ・その地域を良くしたい、という想いを持った人がたくさん集まり、地域に根ざした活動をしている。
- ・「自由」であること。「〇〇しなければならない」ということはなく、ゆるやかな流れの中で無理なく活動できるようにしている。

⑥活動継続にあたって、協力をしていただいている団体、関係者、機関

★キーワード：様々な機関・団体等との連携

- 行政、小中学校、他団体、企業等との協力

※ヒアリングで出た意見

- ・行政の助成金の活用している。助成金を受けられたことだけでなく、周囲の見る目が変わった（信用性が高まった）ことが大きな収穫だった。
- ・地域の小中学校との連携関係（イベント会場として学校に協力してもらったり、学生に教えにいたり相互の協力関係）がある。
- ・平成20年、区が推進する「区民活動拠点ランチ事業」による指定を受け、助成金を受けながら、港南区内の2箇所のランチの一つとして、各種情報の収集・発信を担うことになった。
- ・港南区民活動支援センターともう一つのランチである港南台タウンカフェとも連携している（場の提供を受けたり、一緒にイベントに参加したりしている）。
- ・地域の様々な団体とネットワークを組んでいる。
- ・地元の企業から活動拠点の土地を無償で借りる等の協力を得ている。

⑦困難な状況になった時に、どのように解決していったか

★キーワード：原点への立ち返り、周囲の協力

- 原点に立ち返り、改めて話し合いの場を設ける
- 長く続けてきた人のノウハウは重要
- 困難な状況で投げ出すのではなく、問題をひとつひとつ解決していこうという姿勢、またそれを支える周囲の協力がある

※ヒアリングで出た意見

- ・団体のスタッフや役員に定例会などで随時相談し、工夫できるアイデアを出し合った。
- ・役員が任期が過ぎても自主的に続けてくれる人がいることで、ノウハウが蓄積され、一緒に対応を考えられた。
- ・時代の流れや周囲の状況にアンテナを張っておくことが重要だと思う。

- ・不足要素をあらい出し、問題をひとつひとつ地道に解決していった。
- ・福祉分野が飛躍的に伸びていくときに、一緒にできた。時代にうまく乗れた。
- ・男性で特に肩書きのある活動者の対応に難しさを感じたことはあったが、女性の活動者・スタッフがうまく対応し、解決された。
- ・「イベント屋なのか？」という疑問がメンバー内に湧き上がった際、イベントを一時休止し、会議のみを継続した。そこで、お楽しみ会的なイベントを繰り返すのではなく、本当の子育ての悩みを分かち合い、それを皆で解決する目的で、イベントを行っていく必要があると確認した。

⑧活動が軌道に乗り始めたターニングポイント

★キーワード：参加者を受け入れる体勢、活動の焦点

○参加者の希望に応えられる体勢ができてきた時（場所、情報等の面で）

○活動の焦点を絞り始めた時

※ヒアリングで出た意見

- ・軌道に乗り始めたのは3～5年目。活動場所の増加が、活動者の増加につながった。
- ・発足から5、6年経った頃。ちょうど、ボランティアができる場所が増えてきた頃だった。活動をしたい！と思った人が、すぐに活動できるかどうか重要。
- ・ボランティアの連絡会に参加すること等で、情報が入るようになってきた。
- ・自治会のみでの活動ではなかったことで、活動自体に広がりを持てた。
- ・イベントを一時休止した際、本音で子育ての悩みを語り合う「しゃべり場」をつくった。特にテーマを決めなくても、子育て中のお母さんから、今困っていること、悩んでいることを聞くことができた。お母さん同士が共感し、支えある気持ちが生まれるといった効果があった。
- ・当初はおしゃべりと簡単な活動だけであったが、参加者が飽きてしまい、活動者が減少し始めた。そこで、活動内容を特定化して本当にやりたい人が集まれるように工夫した。

⑨その他

- ・名称の工夫。老人会ではなく、シルバークラブにすると参加が増えるなど、名称の与える印象は大きい。
- ・活動者の悩みや意見を聞く場を設けること。情報交換の場、定例会、勉強会等により、充実した活動や新たな活動へ発展する。
- ・高齢化の進行は否めない。
- ・会社で様々な経験をしてきた人には、その経験を活かしてもらえるようなつなぎ方をすることが大事。
- ・活動をしている人々の意識が高い。
- ・男性の参加が少ない。
- ・リーダーがボランティアについて勉強できる時期があった。

① 活動の立ち上げ、または参加のきっかけ

- ・市営地下鉄の延伸、歩いて20分ほどの場所に下飯田駅が新設され、既存の路線バスは廃止や減便となり、公共交通事情が悪化。危機感を抱いた住民が、平成11年に自治会に特別対策委員会を設置し、地区の様々な問題の検討を開始した。それまでは役員会で検討していたが、役員の任期2年で解決できないと討議未了となり実現されなかった。そこで各層から委員を選出し、立案されるまで活動を継続してもらうことにした。【問題に直面し、現状の仕組みを見直した】
 - ・スタートはあくまで自治会からだった。神奈中バスをこの地域に通したいというのは長年の思いだったが、任期2年の役員会だけではどうしても解決できないということから、特別対策委員会を発足した。
 - ・同委員会で全戸アンケートを実施し問題点を抽出。平成13年に災害時の災害弱者に対して物資供給を行う「生活物資協定」をコープかながわ和泉店と締結。また、災害時に避難誘導や救護などの自主活動を行う「自衛消防隊」を発足した。さらに、高齢者や障がい者の病院までの送迎や外出支援を行うボランティア組織「あやめ会」を発足。
 - ・災害時の救急搬送のためのボランティア輸送を議論したとき、高齢者は日常生活でも病院に行くのに困っているという話が出た。そこで日常的に支えられないかと検討した。自家用車で送迎できるボランティアを募り、利用者は65歳以上の会員制にしてスタート。平成18年にはNPO法人の認証を取得して活動組織を整えた。
 - ・青少年指導員、民生委員等を当時担っていて、昔、子ども会で繋がっていた仲の良かった女性5名で立ち上げた。当時、自治会には婦人会はなかった。「何かやろうよ!」といった声かけをしたところ、前記5名が集まり、発起人としてグループを立ち上げた。
 - ・資金も活動場所もなかった。「まずは自治会館を借りる資金を確保しよう」ということになった。資金確保のため、いらなくなった(履かなくなった)パンストで掃除道具を作り、バザー等で提供。売上金を自治会館使用料として充てた。
 - ・『にこにこ商店街』で朝市をやっていたので、朝市でバザーを開くことについて了解を得て、自分の家の不要品等を出して、資金確保。
 - ・ちょうど港北みどり園の開所と重なり、おむつたたみを月1回始めた。
- 【その後】
- ・仲手原在住者対象の「みちくさ」(デイサービス)
 - ・高齢者昼食会(後に地区域へ広がる)
 - ・80歳以上の方向けの会食会(後に地区域へ広がる)
 - ・おむつたたみ(さわやか苑、ワゲン新横浜、りんどう)
- 【定例会】
- ・月1回(毎月第2月曜日)13:00~16:00
 - ・(時間配分)13:00~15:00 作業
15:00~16:00 情報交換
- ・平成12年、区内丸山台自治会主催の介護ヘルパー2級の講習会に参加した方々が中心となり、港南区やその近隣区において地域の支え合い、助け合いができればもっと住みやすくなる、と思い設立。当初は、地元企業の一室を借り数人の規模で始めた。
 - ・介護保険事業者で見られるのは高齢者だけだが、地域には様々な人がいて、様々なニーズがある。だからこそ、

助け合いにこだわり、柔軟に対応できるよう、任意団体として活動を展開することとなった。

- ・相談内容に応じ、さわやか港南が実施する「有償サービス」のほか、区役所などの行う「公的サービス」や民間団体が行うサービスへの紹介・調整など、パイプ役を担う中間支援組織として活動をスタートさせた。

<立ち上げの仲間・その集め方>

- ・まず自分の思いを声に出してみよう！
 - ・PTAで仲間になった人に自分の思いを話してみたら、共感する人が何人もいた。また、「子育て」に関心のある人に声かけをした。
 - ・ロコミで集まった知人（関心のある人や介護関係者など）で介護保険に関する勉強会を開き、その後、研修会などを一般に広く募集して行い、そして支えあえる地域づくりを目指して団体を設立した。
 - ・自治会長からの呼びかけで自治会の助け合い活動をはじめ、それが有償ボランティア活動に発展。その仲間。
 - ・地域ケアプラザの活動に参加するボランティアのほとんどが50代以上の女性。
- 「うちの主人も定年になって、今日のように1日家を空ける時は、お昼の準備をしなくてはならなくなったのよ」というつぶやきから、セミナーを企画するきっかけ。
- ・奥さんの強い勧めがあり、セミナーに参加。
 - ・地域の広報を見て、自分でセミナーに参加することを決めた。
- ・平成15年、当時の区長が子育て支援の強化を考えたことに伴い、区サービス課こども家庭支援担当が中心となり、2歳児の子育て中の保護者に対する実態調査を行った。
 - この調査で「居場所」「交流」の不足が課題として浮き彫りになった。また、これを受け、区地域福祉保健計画で、未就学児を対象に7地区で「子育て支援会議」の組織化がうたわれた。
- ・南区の異世代交流ひろば設置事業補助金制度の申請が一つのきっかけ（民生委員の自宅を改修して、誰でも集える場所を作った）
 - かのえサロン 活動発足経緯
 - ・地元民生委員の自宅の活用+企画者（元事業者従事職員）の協働
 - 身近な地域で高齢者の方々の集いの輪を広げる
 - 楽田の郷 活動発足経緯
 - ・グループメンバーから自分たちでできるボランティア活動を始めようという声があがり、子育て中のお母さんとその子どもを対象とした活動を開始
 - たすけあい別所チャイム 活動発足経緯
 - ・区社協とCPで企画したボランティア講座がきっかけ。講座終了後に参加者から交流機会の少ない高齢者や障がい者が、気軽に集える居場所を作りたいという声が出て活動開始
 - ひなたぼっこ 活動発足経緯
 - ・介護保険に頼らなくても、安心して生き生きと暮らしていけないか。空き店舗を利用して地域ぐるみで支援できる体制を作れないかという課題から活動が開始された
 - ふらっとステーション 活動発足経緯
- ・アップダウンのきつい神奈川区では、身近なところで親子の交流の場を作らないと子育て中の親は孤立してしまう。区で1ヶ所、月1回などのイベント的な取り組みでは支援になりにくい。（神奈川区各連合町内会と子

育て支援グループ)

- ・作業所びぐれっと開設にあたり借りられた場所は新橋地区の崖下。見るからに危ないので、なんとかしてあげなくちゃ、と地域の人は思った。
新橋の福祉を進めるために、お互いがまず誘い合って、知り合って、助けあってという発想から生まれた。気軽に誰でも参加しやすいお祭りを、皆で協力して催す。難しいことは考えず、ワーワー楽しくやっていくことで、お互いの理解が深まってきた。他の事業と合わせて、施設通所者も含め、顔の見える関係づくり、ゆるやかな地域の連携、支え合いの仕組みができることを目指す。(泉区新橋連合町内会と障害者通所施設びぐれっと)
- ・横浜市南区地域福祉保健計画の中村地区計画を検討する際に中村地区全体のまちづくりにおいて、「外国人との共生」を盛り込むことになったのが始まり。その後、地区計画を進める上で、「ふるさとづくり」を目標にした外国人支援を対象のひとつとして、子どもからお年寄りまで多くの人が交流できる仕組みづくりを目指した。(外国人の数の増加、不法滞在者への対応の難しさ、高齢化とともに認知症になる外国人の高齢者などの問題。また、中村地区で生まれ育った外国人の子どもたちの就学・教育の支援や、外国人家庭の子どもたちにとっても、ふるさととなるまちづくりを地域全体で進めていくことの必要性)(南区中村地区社協とNPO法人在日外国人教育相談センター信愛塾)
- ・15年前の横浜環状南線建設計画、障害者施設建設計画に対して、住民が知らないうちに一部の自治会役員により賛成・反対が表明され、危機感を抱いた。以来、民主的な地域運営、合意形成が住民自ら行えるよう組織される(湘南桂台自治会「グループ桂台」とシニアクラブ「桂山クラブ」)
- ・赤ちゃん学級から発展した子育てサークルの活動が盛んであるが、乳幼児親子が自由に集える場が少ないということから、子育てサロンを身近な商店街の空き店舗を活用して実現させ、区民が主体的に運営することを区役所がサポートする仕組みを目指す(南区子育て当事者の代表者と連合町内会、商店会等「さくらザウルス」)
- ・中区の中でも特に本牧地区は障がい者が比較的多く暮らす地域であり、まず知り合うことが必要だということで、区内の障がい者団体と本牧・根岸地区を中心としたイベントで、作業所側は物品販売を通じた財源確保、地域側には障がいについての理解を深めてもらう(障害者作業所・グループホームと地縁型組織)

② 立ち上げ費用、運営費用の調達の工夫

- ・(外出支援について) 料金はタクシーの半額を目安に行き先によって300円~1350円としている。地区内の商店で利用券を購入し、それで支払う。料金の8割は活動員の対価とし、その中からガソリン代などを賄う。
- ・(Eバスについて) 地元観光会社と契約して小型バスを走らせる。運行開始前の会員募集では70人しか集まらず採算ラインに達しなかったが、観光業者の好意と、自治会会員から募金で基金を設けることで契約運行にこぎつけた。会費は利用頻度に応じ月2000円~7000円。現在、1日平均150人が利用し、採算ラインは確保している。
- ・バザー(年3回)、夏祭りの夜店
5月:篠原地区全域バザー実施
5月第2土曜日:ふるあい祭り(仲手原自治会主催)
10月にもバザー有り
地元のお祭りの夜店出店(2日間で28万売上【今年度】)
運営資金は、全てバザーや夏祭りの夜店で自主財源確保。
区社協の助成金や地区社協、自治会からの支援も特に受けていない。

会員は個人のお金の持ち出しはしない。

- ・有償により、利用者から利用料金をいただくこととした（1時間 850 円、750 円は活動者への謝礼、100 円はさわやか港南の収入）。当初、周りから有償に対する反対意見もあったが、活動を続ける中で理解が得られるようになった。
- ・平成 15 年、利用者でもある家主さんが、自宅を低料金で貸してくださることになり、現在の場所に拠点を設定することができた。
- ・助成金、利用料金、会員の年会費、バザー等の収入で賄っている。

<参考>

【会員数】（22 年3月末）

利用会員：180 名（サポートを利用される方）

協力会員：58 名（サポートの担い手として活動して下さる方）

賛助会員：94 名（活動は行わないが、財政的に支援して下さる方）

合計 332 名

【年会費】

協力・利用・個人賛助会員：3,000 円

家族会員：5,000 円

企業・団体の賛助会員：10,000 円

- ・行政の支援を活用する（補助金など）
- ・利用者の参加費・リサイクル等で必要経費をまかなっている。
- ・改装費用にかかる費用は自己資金と助成金で調達している。

・区役所から補助金 10 万円

・民生委員の知人の文房具店から安価で購入
かのえサロン プログラム 必須アイテム

・自宅の活用（費用の削減という意味で）
かのえサロン、楽田の郷、別所チャイム

・寄付でいただいたおもちゃを使用（費用削減）
別所チャイム プログラム1

・自治会が購入した卓球の道具を使用させてもらっている
ひなたぼっこ プログラム2

③ 活動に継続的に参加している人がいる(増えている)理由、秘訣

- ・新しい人にも活動に参加してもらいたいという思いはある。しかし運転や添乗は事故等の責任もあるし、体力、神経も使う。押しつけはできない。やってみたいが自信がないという人が多いと思う。そういった人たちに対して、何かあったときには皆で考える、「仲間がいる」という実感を持ってもらい、不安を解消してあげることが重要。
- ・何か取組が必要だとわかっている、自分からやろうという人は少ない。最初が1人2人では増えていくのはなかなか難しい。最低でも5人からいないと、10人には増えていかない。

- ・民生委員になった方がメンバーに入ってくれている。
- ・会社勤めを終え、「何かやりたい」という噂を聞きつけ、声かけする。
- ・口コミ
- ・「安全・安心街づくり講座」を開催し（21年度は7回開催、22年度も開催予定・3年目）、自分の住んでいるところを知ってもらうことから始めている。このようにプロジェクト的に仕掛けて、さわやか港南についても情報提供し、理解してもらう機会を作っている。
- ・活動したいという人に、どんなことができるか（得意分野は何かなど）聞いておく。参加者の主体性を大切にしている。
- ・ヘルパー資格のある方で、介護保険事業者に登録している方も、垣根を設けず、さわやか港南に登録していただいている。
- ・会員でないと利用できないという決まりはない。利用してみて自然に登録して下さるようになる。活動者にも、活動を見てもらい、そのうち参加につながる人が多い。利用者・活動者の気持ちを柔軟に受け止めて、つなげるという過程をゆるやかにやっていくことがポイント。活動者・利用者にとって参加・利用することへのハードルが高くないようにしている。
- ・あらゆる困り事の相談に乗る活動を行っていくうちに、利用している方がお互いに助け合おうという気持ちになってくださり、スタッフになってくれたり、ボランティアを買って来てくれたりと徐々に活動を支えてくれる人材が増えていった。生活に密着した活動であることがポイントではないか。
- ・拠点の外（入り口前）に掲示板とチラシラックを設置し、区内の市民活動・生涯学習団体の情報の他、福祉、子育てといった行政発行のもの、地域発行の情報誌などを配架。掲示物を見て拠点内に立ち寄る方も増加している。
- ・丸山台商店会が発行する情報誌「はあとふるたうん丸山台」の記事（「さわやか港南より、安心・安全のコーナー」など）を担当し、情報提供している。
- ・担い手本人のやる気だけに頼るのではなく、やる気を引き出すまたは高めるような工夫がある。
- ・活動には、担い手の事情や都合を尊重することにより、担い手の負担が少なくなるような工夫がある。
- ・活動の価値が地域の人々に認められたり、感謝の気持ちが表わされたりすることで、担い手は活動に対して手応えを感じている。
- ・担い手の都合を尊重し、負担を軽減した活動となっている。
- ・参加を希望する担い手が、自分の都合や興味・関心に合わせ、特技や経験等をいかすことができる柔軟な活動形態が見られる。
- ・自分ができる範囲での活動となっている。
- ・担い手の精神的負担感を軽減するために、活動する際にこころがけることをまとめたパンフレットを作成し渡している。
- ・活動に対する労力や拘束時間の対価として、あるいは参加している証として、現金や地域通貨等活動の価値を目に見える形で担い手に渡している。
- ・活動の受け手から感謝の気持ちが伝えられ、担い手のやりがい（達成感、満足感）につながっている。
- ・仕事等で培った能力を生かすことができる。
- ・できることを登録してもらうことで担い手の数が増加し、サービス提供メニューが増え、受け手の要望によりきめ細やかに対応できるようになってきた。
- ・誰でも登録できるメーリングリストを開始したところ、参加者が増えた。

<推進者の役割・心構え>

- ・みんなが主役。みんなが作る。
- ・頑張りすぎない。無理をしないでのんびり続けること。
- ・最初からすべて完璧にする必要はなく、やっていながらみんなで中味を作りあげていきましょう。
- ・無理をせず、来られる人が来て、いる人でやっていく。やれるように、やりたいようにやる。また、意見交換の場もちましょ。誰でも受け入れ、その人らしさを認め合うことが大切です。その人を生かしましょう。
- ・セミナーは半年。終わった時点で、自主化して継続するかどうか意思決定している。
- ・地域ケアプラザが考えた「子育て支援会議」への関わり方は、会議の組織化やいくつかの子育て事業の立ち上げのみでは、地域の子育ての課題を解決することにはならない。地域を、子育てしやすいまちにするためには、地区の中での子育ての課題をさらに明確にし、顔の見える関係の中で地域の人たちを主体とした活動にしてい
く必要があるという認識。
- ・ご近所に住んでいる活動の上達者をうまく活動に巻き込んでいる
かのえサロン ポイント
- ・サロンに参加しているお母さんの口コミにより新たな参加者が途切れることなくやってくる
別所チャイム 活動のヒント
- ・ボランティア同士に何でも話し合える雰囲気がある
- ・地域課題を住民同士で時間をかけて考え、解決に結びつけてきた歴史と実績がある。成果が現れなくても丁寧に議論を重ね、信頼関係を作る風土がある
ふらっとステーション 活動のヒント
- ・たくさんの行事があってたくさんの参加者が集まる。踊りや民謡といった手習いの場もたくさんある。普段の活動だけでなく、こうした場があるからこそ親しく話し合うことができる。このまちには人がつながるチャンスがある。場面設定がある。(ぴぐれっと施設長)【活動に関わってもらう人を広げるために、まちの中に様々な知り合う場面をつくっている】
- ・勉強会を行うなど、いつもと違った学びの機会をつくる。【課題解決に直接結びつく活動だけでは疲れてしまう。メンバーの興味に合わせて講師を呼んで勉強したり、他事例を見学したり、「学びの場」を積極的に設けることで、ちょっと力を抜いて、新しい知識や情報を得ることができる】

④ うまく活動が継続している理由、秘訣

- ・活動員は任意保険、ボランティア保険に加入し、事故が起きた場合はあやめ会の事故委員会が対応。重度の要介護者は付添者に同乗してもらっている。【運営体系の整備がなされている】
- ・Eバスについて、添乗員の中には77、8歳の人もある。状況はあまりよくない。定年退職したばかりの、若い人にも参加してもらいたい。多少添乗員への収入を上げることを考えてでも、新しい人に参加してもらいたいと感じている。
- ・Eバスについて、添乗員をしていると、乗客と他の場所で会ったときも挨拶してくれる。ふれあいがある。それがうれしくてやっている。収入がほしくてやっているのではない。
- ・開始当初は60人ぐらいの乗客がいればよかった。今では一日150人ぐらいの乗客がいる。効果が明確に見えることでやりがいもてる。自分の財産だと思える。

- ・地域の人々は働いているときに様々な経験をしてきている。役員会等でそれを引き出し、活かしてもらうよう努めている。
- ・自治会ニュースを毎月発行し、回覧ではなく全戸配布している。利用者の喜びの声を載せるなど、逐一活動の報告をすることで、地域住民からも賛同を得やすくなり、活動もしやすくなる。
- ・会をつくる以上に、できた後の存続がもっと重要。活動に参加できるように、背中を押してあげることも必要。
- ・物事を決める時に、安易に多数決で決めない。多数決では反対派の意見を押し切って決めてしまうことになる
- ・決めるときはじっくりと話し合い、全員一致で決める
- ・仲手原自治会発行の新聞で、活動のお知らせ等記載する。
- ・自治会の掲示板を活用し、イベントのお知らせをする。
等、広報活動にも積極的に関わっている。
- ・仲手原自治会館を有効活用
立地良し（駅近、駐車スペース有、付近に公園有、保育園有、商店街有）のため、様々な事業に有効的に活用されている。
- ・10年後の姿を想像して、既存の福祉サービスではまかないきれないところをどのようにサポートしていくか考え、仕組みづくりをしていく必要があると考えている。
- ・民生委員や体育指導員など、地域のキーパーソンにさりげなく語りかけている。→会員に登録してくださる方が増えている。
- ・キーパーソン・コーディネーターである川辺さんの負担が大きい。その引継役は、何人かおり、特別な研修などはない。一緒に活動しながら利用者ともふれあう中で、コーディネーターとしての動き方を肌で感じて学んでいる。
- ・利用者の力を借りることがある。例えば、「ちょいさわ」（障害者を対象に各種レクリエーションなどの交流事業を実施）の利用者に畑に行って野菜を収穫してもらうなど協力してもらうことがある。
- ・月1回定例会を開催し、活動者の悩みなどを聞いている。
- ・活動を担う人が活動に参加するにあたって、その自発性が尊重されている。
- ・活動の理念に共感する個人が対等な立場で結びついており、誰でも参加できる開放的な体制となっている。
- ・理念、活動内容、運営に関する情報提供に努めている。
- ・理念を重視し、リーダーを中心に内外に明確な活動理念を発信している。
- ・誰でも参加でき、参加者の間に上下関係がない、開放的で水平的な組織形態となっており、運営の透明性を意識し、情報公開に努めながら活動を行っている。
- ・担い手が内部で上下関係に縛られることなく、必要に応じて有志で活動を企画するなど、個人が持っている能力が発揮しやすくなっている。
- ・原則として参加者資格に特別な限定はなく、加入・脱退とも個人単位で自由である。
- ・関係者間を調整する事務局的な機能が存在している。
- ・コーディネーターを育成している。
- ・交流会等横のつながりを意識した取組を実施している。
- ・広報誌、HP等により情報を発信している。
- ・住民の切実なニーズに対して、きめ細かく柔軟に対応している。
- ・活動に、住民の能力、建築物、自然といった資源がいかされることで、新たな価値の創造につながっている。

- ・無料でなくても希望にあったサービスを求める方が増えており、有償化することにより活動も多様化、活発化している。
- ・活動の内容を議論する際には、参加者全員の合意を重視している。
- ・活動実績、会計報告等、活動内容について日頃から第三者に公開し、その意義を広く知らせることに努めている。
- ・組織に対する信頼感が生まれることにより、受け手は安心してサービスを利用できる。
- ・サービスがその地域全体で必要とされている場合、住民自らが労力を提供したりコストを負担している。
- ・仕事で培った技能のある方や、地域情報に詳しい方の経験や能力をいかしている。

<情報（周知・PR）>

PR方法として、

- ・チラシを作る
- ・チラシをポスティングする。（近所など）
- ・新聞に掲載する。
- ・自治体の広報に掲載する
- ・ホームページを作る
- ・自治会の回覧板に載せる、またはあいさつをする

<これからはじめる方へのアドバイス・メッセージ>

- ・とにかくはじめることが大切！
- ・継続することも大切。無理せず身近にあるものでできることからやっていくこと。
- ・地域のニーズに合わせることも大事。ニーズがあつてこそ、居場所は成立する。
- ・最初から行政に頼らないこと。自分たちができることから考えていった方がうまくいく。
- ・近隣との交流を大切に。

<ルール>

- ・役割を決めない
- ・自分のことは自分です
- ・誰がきても「あの人だれ？」という目で見ない
- ・プライバシーを聞き出さない
- ・テレビは置かない

<運営のコツ>

- ・利用者のニーズや地域環境などに、いつでも変化・対応できることが大切。
- ・自分たちで規約をつくり、目標を設定し、年間計画を立てている。このように、自分たちで話し合い合意形成して計画をつくることが、継続している理由。
- ・セミナーに参加する中で、ギブアンドテイクの意識が生まれてきた。
- ・地域ケアプラザがいろいろ考え、仲間づくりや楽しんで習得する自立支援のプログラムを提供してくれることに対して、恩返ししたいなという気持ちがメンバーの中に生まれてきた。

- ・計画的な活動を実施

→定期的に解放している「フリースペース」

年度の前半に毎月実施する「各種イベント」

年度の後半に行うお母さんの「勉強会」と

「しゃべり場」

※ 課題があるならば、就園までに解決したい。1年を1サイクルと考え、上半期にはイベントを多く開催して、子育て中の親が地域に出ることを促し、仲間づくりを進める。下半期には「しゃべり場」を開催する。上半期に知り合い、関係が生まれたところで、子育ての悩みや課題などを話し合ってもらい、解決を図ったり、翌年のイベントの参考にしていく。

・活動内容を発表する機会を設けている（参加者の張り合いになっている）

かのえサロン 活動内容

・おしゃべりがはすむ環境にある

かのえサロン 活動内容

・担い手の才能・経験等の活用

（習字能力の写経への活用）

かのえサロン 活動内容

・参加者がやりたい活動を行っている（手工芸等）

楽田の郷 活動内容

・本当に楽しい活動の企画・楽しいおしゃべり・交流の輪を作る。 楽田の郷 活動のヒント

・自宅開放ということで、その家の文化やあたたかみを利用者が感じられるところ 別所チャイム プログラム1

・参加者の自主性を出すためにお茶のみについては、セルフサービスとしている ひなたぼっこ プログラム1

・参加者はゆったりとした時間の中でそれぞれ自分の好きな活動に参加して時間を過ごす ひなたぼっこ プログラム1

・自治会館を使用しているため、会場は誰もが知っており集まりやすい。 ひなたぼっこ ポイント

・自治会関係者の十分な理解を得ながら活動をしている

ひなたぼっこ ポイント

・地域に根を張る活動を続けて、住民から信頼を得ている

ふらっとステーション 活動のヒント

・地域に良いと思うことはどんどんチャレンジする

ふらっとステーションドリーム ポイント

・住民とサロン両者にとってプラスになるシステムの構築

ふらっとステーション ポイント

・広場の運営方法について、他区の先行事例を学びに行った。そして自分たちのやり方を考えるようにした。（さくらザウルス事務局長）【支援機関が手を出しすぎず、活動内容を自分たちで決めていこうという主体性が育つことが大切】

・集まったメンバー同士で小さな目標をつくる。

・みんなで仲良く楽しくやろうよ、というのは核になる人の共通の思い。いつも笑顔。しかしやりとりは率直。感情的でなくさりと言っている。セクショナリズムもない。誰でも巻き込んでいくが度もわきまえている。

（ぴぐれっと施設長）【担い手や参加者にとって楽しい活動になっているか確認する】

・地域ぐるみの活動を継続していくために、地元の小学校を巻き込み、実行委員会形式で活動を展開している。

ここで様々な課題を共有し、催しの内容を検討している。(信愛塾スタッフ)【成果や課題、これからの目標を共有する】

- ・ 検討や共有する内容に応じて、会議の場を2つに分けています。1つは地縁型組織の役員や支援機関職員と共有する場として運営委員会があり、もう1つは現場の中心メンバーが集まる会議があります。現場の決め事は現場の中心メンバーが集まる場で決めていきます。(さくらザウルス事務局長)【共有する内容に応じてメンバー選びや会議の設定を支援する】
- ・ 区社協のモデル事業として位置づけることによって、地縁型組織とテーマ型組織がいっしょにやる気運がうまれた。(中村地区社協会長)【支援機関の役割や既存の仕組みを見直す】
- ・ 地縁型組織の方にNPO法人さくらザウルスの理事として入ってもらうことによって、地元根付いている人の力を借りることができる。資金確保、地域とのつながりづくり、リーダーシップ、そして社会経験の少なさをうまく補っている。理事長が連合の会長であったため、空き店舗の契約時に信頼していただいた。地域の役員は高齢の方が多く、そうした方が活動に参加してくれていることで安心感につながっている。(NPO法人さくらザウルス)

⑤活動継続にあたって自慢できること

- ・ 区社協でも送迎をやっているが、1ヶ月前に予約をしなければいけなかったり、何かと制約がある。1ヶ月前から病気になるかどうかなどわからない。やはり何か用事ができたときに、すぐに対応できる体制が地域になればいけないと思う。
- ・ 自治会の下で、「あやめ会」や「福祉の会」といったスタッフが下支えをしてくれている。何か新しいことをやろうというときに、リーダーもちろん必要だが、そのリーダーを支えてくれる人々がいることが何より大きいと思う。
- ・ 悪口のない雰囲気
- ・ 「自由さ」は有る程度必要
→活動は自主性・自発性。メンバーが「お互い様」。これが長く続く秘訣!
- ・ 団体の規模が大きくなっても、「困った時はお互い様」をモットーに地域での助け合い・支え合い活動をしていくという基本理念は変わらないこと。
- ・ 「自由」であること。「〇〇しなければならない」ということはなく、ゆるやかな流れの中で無理なく活動できるようにしている。
- ・ 拠点である居場所(一軒家)がアットホームな雰囲気で誰もが落ち着く場所であること。
- ・ 待っているだけでなく、現場に出かけていけるということが活動の強み。
- ・ ボランティアと参加者の信頼関係が厚く、ちょっとしたことを相談できる関係を築いている。
ひなたぼっこ ポイント
- ・ 喫茶店で使用する食材・材料はなるべく地元の商店で購入し、地域経済を活性化する取り組みも地道に行っている
ふらっとステーション プログラム1
- ・ マイショップ、展示スペース、貸室のしくみを作っており、住民もふらっとステーションも共に成長できるしくみづくりをお心がけている
ふらっとステーション プログラム2
- ・ 情報相談センター・掲示板・カレッジ

住民に情報が伝わる場

ふらっとステーションプログラム3

⑥活動継続にあたって、協力をいただいている団体、関係者、機関

<助成金について>

- ・平成19年、住民自らが主体となってまちづくりのアイデアを提案する「ヨコハマ市民まち普請事業」のコンテストに応募したところ事業化が決定。車椅子利用者のためのリフト設置と相談ルームの建設費用などに、整備助成金500万円が交付された。
- ・平成20年、区が推進する「区民活動拠点ランチ事業」による指定を受け、助成金を受けながら、港南区内の2箇所のランチの一つとして、各種情報の収集・発信を担うことになった。
- ・助成金を受けられたことだけでなく、周囲の見る目が変わった（より信用性が高まった）ことが大きな収穫だった。

<その他>

- ・小・中学校との連携関係ができています。
- ・港南区民活動支援センターともう一つのランチである港南台タウンカフェとも連携している（場の提供を受けたり、一緒にイベントに参加したりしている）
- ・地域の様々な団体とネットワークを組んでいる。
- ・地元の企業から活動拠点の土地を無償で借りる等の協力を得ている。
- ・地域ケアプラザ
→ケアプラザ内部でも、各部署が「いきいきセミナー」に関して温かく見守ってくれた。
- ・セミナー協力者として、ヘルスメイト、住まいの修繕学校、区役所、消防署
- ・ボランティア活動先として、中途障害者の会、高齢者への食事会
- ・区役所、地区センター、保育園、育児サークル、町内会、老人会、主任児童委員
- ・地区社協、区社協、地域ケアプラザ、区役所
かのえサロン
- ・包括支援センター、地区社協
別所チャイム
- ・ケアプラザ、区社協、連合自治会
ひなたぼっこ
- ・大学機関（専門家）、連合自治会、
フラットステーション
- ・事業の活動報告としてニュースレターを作り、地区社協の協力を得て、回覧している。また地域ケアプラザが活動を写真に撮って館内に掲示してくれている。（信愛塾スタッフ）
- ・支援機関は例えばテーマ型組織に地域のそうした活動の情報を提供したり、時につないだりすることで参加の一步を手助けすることができる。
- ・活動が安定して継続できるために、団体の困りごとをよく見極め、活動の段階や対象に合った情報を提供し、活動をサポートする。【協働が安定したものになるための情報を提供する】

- ・ 支援した事例を他地域の人にも知らせ、地域の人たち自身にその活動の意義や自分たちの地域で実践することの必要性を感じてもらうことも大切。情報を発信し、外部から評価を得ることは、活動者のやる気にもつながる。【活動の意義や実態を発信し共有する】
- ・ 地域ケアプラザが関わることで、近隣の自治会町内会が結びつきやすくなります。また、活動内容を館内に掲示するなど、情報発信しています。（南区中村地域ケアプラザ所長）
- ・ 区づくり事業として位置づけるため1年間かけ、子育て連携会議のメンバーとともに、連合町内会の役員などを説得した。そうすることで、温度差のある地域が、それぞれのスピードで子育てサロンを立ち上げることができた。（神奈川区サービス課職員）【①問題意識を共有し、地域のニーズを把握する②地縁型組織の協力を得られるよう、支援機関と一緒に依頼に行く③活動をバックアップする助成金の申請を促す④他の自治会町内会の取組状況を伝え、やる気を促す】
- ・ 子育てサロンを区内の身近な全地域につくるといふ、地域全体・区全体で取り組むことが必要な活動になれば、これまでつながりが十分でなかった地域振興課職員とサービス課職員も連携する必要性が出てくる。こうしたときに、活動する私たちが区役所の職員に対し、他の部署の職員を紹介しつなげることもある。（NPO法人親がめメンバー）【支援者側の連携を見直す】

⑦困難な状況になった時に、どのように解決していったか

- ・ Eバスについて、一般貸切りバスを路線バス化するための問題点として
 - ①不特定の人を乗せたり料金を取ってはいけない
 - ②運転手は運転するだけ、他の業務をしてはいけない
 - ③バス停や時刻表を表示してはいけない 等があった。
 解決策として、
 - ①特定の人を決めるため会員制をとる。料金ではなく会費とする
 - ②運転以外の業務を行う添乗員（ボランティア）が同乗する
 - ③バス停や時刻表は表示せずに会員に直接通知し徹底する 等して克服した。
- ・ 役員の任期が過ぎても、自分の地域を良くしたいという思いを持って、自主的に続けてくれている人がいるというのが何より大きい。任期中だけは引き受ける、という人がほとんどという状況の中で、こういった人たちが支えになっている。
- ・ 特に“困難な状況”になった…という認識はない。しかし、篠原地区内で仲手原は進みすぎているかな？と感じることもある。井上会長曰く「時代の流れに上手く乗れた結果、30年近く活動が続いているのではないかな」ちょうど福祉分野が飛躍的に伸びていく時に、一緒にできた。（その時になって慌てて組織化されたグループは、今となっては解散しているグループも多い。）
- ・ 利用料を支払えない状況にある方への対応。随時、スタッフやさわやか港南の役員にも相談しているが、基本的には困っている状況にある方の相談は断らないことにして乗り切っている。
- ・ 男性で特に肩書きのある活動者の対応に難しさを感じたことはあったが、女性の活動者・スタッフがうまく対応し、解決された。
- ・ 困ったことがあれば、月1回の定例会などで相談している。
- ・ 「イベント屋なのか？」という疑問がメンバー内に湧き上がった際、イベントを一時休止し、会議のみを継続した。そこで、お楽しみ会的なイベントを繰り返すのではなく、本当の子育ての悩みを分かち合い、それを皆で解決する目的で、イベントを行っていく必要があると確認した。

- ・活動対象を固定しているため（2～3才の子ども）一定期間が経過すると活動参加者が減少することになるが、口コミで新しい参加者が活動に加わるため、活動自体は継続できている
- 別所チャイム 活動のヒント

⑧活動が軌道に乗り始めたターニングポイント

- ・活動が軌道に乗ってきたなあ…と感じた時期は発足から5～6年経った頃。
 - ちょうど、ボランティアができる活動場所が増えてきた時期。活動場所が増える＝人を動かせる場所ができる ということ。やはり、「ボランティア活動をしたい!」と思っている人が、すぐに活動できるか否かでモチベーションも違ってくる。
 - ・地区ボランティア連絡会や、区ボランティア連絡会に参加することで、他地区、他地域の情報を知ることができた。
 - ・「自治会のみでの活動ではない」ことが良かったのかも知れない。
 - ・一戸建て住宅を活動場所にしてから（活動3年目）、多様なサークルへの活動場所の提供、たまり場「ちょいさわ」の活動など、「まちの居場所」としての性格が強まり、軌道に乗り始めた。
 - ・「ヨコハマ市民まち普請事業」で多目的スペース（相談ルーム）が増築され、地域交流拠点としてさらに充実した活動となった。
 - ・イベントを一時休止した際、本音で子育ての悩みを語り合う「しゃべり場」をつくった。特にテーマを決めなくても、子育て中のお母さんから、今困っていること、悩んでいることを聞くことができた。お母さん同士が共感し、支えある気持ちが生まれるといった効果があった。
 - ・活動発足当初、「こども会があれば、子育て支援の必要などないのでは」という地域の声があったが、現在では、地域団体役員や地域の非子育て支援の取組の理解が得られるようになってきた。
 - KOCOハピ通信の発行や、様々なイベントの継続的な開催で、お母さんたちが「頑張っている」「楽しそうにやっている」と見られたから。
 - ・当初はおしゃべりと簡単な活動だけであったが、参加者が飽きてしまい、活動者が減少し始めた。そこで、活動内容を特定化して本当にやりたい人が集まれるように工夫した。
- かのえサロン 活動のヒント
- ・区内35か所で「親子のたまり場」を住民主体で開催することに成功している。その後、「親がめ会議」は子育て支援拠点の運営をコンペで獲得。NPO法人として「すくすく小がめ隊」を含めた地域子育ての場の支援を仕事として行える立場、拠点、安定的人材確保の財源を得た。（NPO法人親がめ）
 - ・自治会活動は理事会を中心に行われるが、「まちづくり委員会」が自治会長諮問機関として機能し、「まちづくり」全般に関わって、中長期的な企画を担当している。ここに、理事が委員として毎年10人参加している。その結果、自治意識の醸成ができたり、各組織の人材供給源ともなっている。毎年続けた結果、自治会・シニアクラブ、たすけあい団体のいずれか、または複数に関わる人が多くなり、顔の見える関係づくり、地域課題解決に向けた連帯した活動が可能となっている（栄区湘南桂台）
 - ・ここ5～6年で障がい者運動の流れが変わった。地域が理解してくれない、ではなく、理解してもらうためにはどうすればよいかを考えるようになってきた。（中区障害者団体連絡会）

⑨その他

- ・「遠い親戚より近くの自治会」をモットーに自治会で高齢者を支える活動が定着したことが大きな成果
- ・送迎については、みな運転手が顔見知りだということで安心して乗りきってくれる。知らない運転手ではこうはいかない。やはり、その自治会はその自治会の人運転手をやるべきであると思う。
- ・高齢化が進んでいる。次の世代である団塊世代にいかに関わり活動に参加してもらうかが活動進展の大きなカギ。将来的にはコミュニティビジネス的な組織が生まれ、そこがEバスの運営を行っていきけるようになればという夢も抱いている。
- ・できないことばかり言うのではなく、どうしたらできるか考える。
- ・地域ケアプラザや地区センターは近くにあるが、そこまで行けない人もいる。町内会館はさらに近いところもあり、利用者には近所の方もいる。
- ・会社でいろいろやってきた人には、その経験を生かしてもらえようなつなぎ方をしていくことが大切。

- ・支えあい活動（2か月に1回）に協力
 - 地区の民生委員8名と一緒に要支援者の訪問活動の実施。
この活動に協力しているボランティアは、守秘義務の上で活動しているため、定例会で話がでることはない。
⇒ プロ意識を持たれた方が協力されている。
- ・年齢が上の層が多くなってきたので、やはり、若い人にも入ってもらいたいと思っている。
- ・名称「マザークラブ」
やはり、男性も一緒に入って動いてもらえると良いかな…と思う。

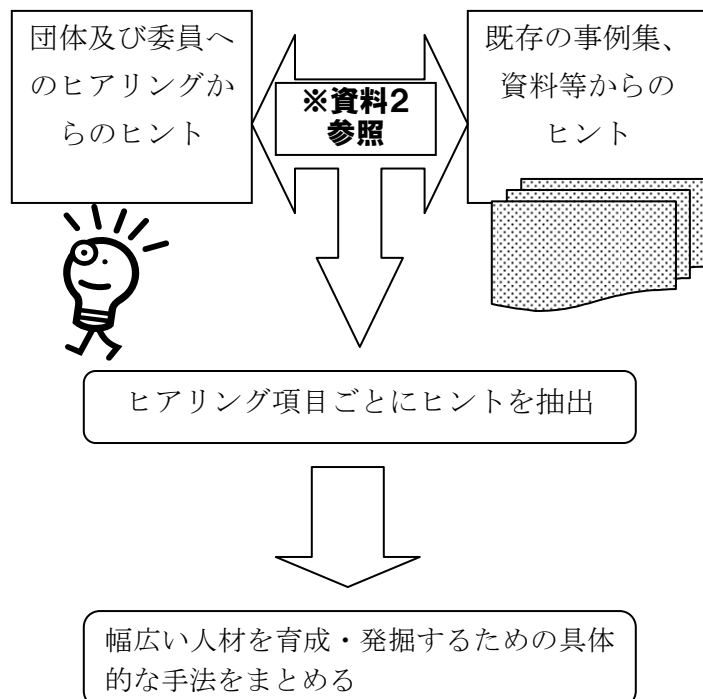
- ・地域の自立を目指したい。地域の状況や地域資源・インフォーマルサービスを理解したうえで、地域性に合わせた活動、運営やネットワークを作っていくことが大事。
- ・関係機関・団体との距離をうまく保ちながらを周りを巻き込んでいくようにしている。
- ・一緒に食べたり飲んだりすること。同じものを同じ空間で味わうと自然と雰囲気はよくなり、話が弾む（「さわやか提灯」月1回（金曜）、事務所を活用して行っている）。
- ・コーディネーター・ネットワークを今後どう育成していくかは他の活動においても共通した課題ではないか。
- ・21年度初めて横浜国大より2名のインターンシップの学生を受け入れ、一緒に活動をしてもらった。22年度は横浜市大から5名のインターンシップの学生を受け入れる予定。様々な活動に積極的に参加してもらい、開かれた活動にしていきたい。

- ・地域における空き施設や既存の地域施設などを最大限に利用し、新しい用途で施設を活用する等の工夫を行っている。
- ・地域独自の産業、文化、自然などを大切に育てたり、地域の歴史を尊重する…して、地域の個性をいかした取組を行っている。
- ・地域の人的・物的資源を活用し独自性をいかした活動は、地域の関係者に対する誇りや愛着といった価値を実感させ、そのことをきっかけとして、さらに地域の活動への参加が活発になるといった好循環が生まれている。
- ・地域の資源を活用し個性をいかすことで、地域内で人、物、資金、情報が循環し、また地域外から人が流入するなどの経済的効果も生まれている。
- ・地域の個性を尊重することで、地域にほこりを持ち、愛着が深まり、活動者の参加が増える。

- ・地域に対する誇りが感じられると、住民は主体的に地域活動に取り組むようになっていく。
- ・開講当初、「個」であった受講者が仲間となり、自らサークル化し、さらにその集団が、主体的なセミナーの継続だけではなく、新たな地域交流の企画・実施やボランティア活動の参加に発展している。
- ・男性特有の組織化したグループ活動の展開は、新たな地域活力を生み出している。
- ・定年を、迎えようとしている世代は、長い間、会社人間として生きてきて、余暇の使い方に器用な人が少ない。また、この世代の多くは、自分の親の介護は当然するものであっても、自分たちの老後を子ども世代に委ねるわけにはいかないと考えている。
- ・定年を迎えた世代の男性は、短期間では友人になりにくい。ある程度時間をかける必要がある。半年は地域ケアプラザが運営するセミナーに、その後半年は地域ケアプラザが見守りながらも自主的に活動すればと考えた。
- ・受講者の主体性を妨げないように対応すること、どの受講者にも公平な姿勢で対処することが重要。また、仲間づくりの場で明るい雰囲気づくりも大切。
- ・子育て中のお母さんにも「地域住民」であることの自覚を促す。子育てに関わるだけではなく、地域に関心を持つ必要がある。
- ・活動に自信を持ち、他のお母さんたちに積極的に声をかけるようになってきた。(主体的な活動をするようになった)
- ・活動内容のPRと財源確保、安定した活動継続を課題として捉えている
楽田の郷 活動のヒント
- ・何回か勉強会を実施し、他のサロン活動の見学も実施した
ひなたぼっこ 活動のヒント

1 内容

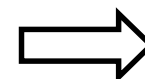
団体及び分科会委員へのヒアリング及び既存の事例集、資料等からヒントを抽出し、活動の継続、発展に向けて、幅広い人材を発掘・育成するための具体的な手法をまとめていきます。



2 幅広い人材を発掘・育成する視点からのキーワードの抽出

ヒアリング項目(資料2参照)の中で、幅広い人材の発掘・育成について触れられている①③④⑤⑧の項目のキーワードを抽出し、「発掘」「育成」に分類しました。なお、②⑥⑦⑨の項目からも関連する内容を抽出し、キーワードに加えています。

ヒアリング項目	キーワード	①=発掘 ②=育成
①活動の立ち上げ、または参加のきっかけ	○地域の問題に直面したこと・現状を見直す機会があったこと	①
	○声をあげて中心となる仲間をつくること(一人では難しい)	①
	○地域のニーズを把握すること	①
③活動に継続的に参加している人がいる(増えている)理由、秘訣	○参加がしやすくなるきっかけを仕掛けること	①
	○参加者の主体性や気持ちを柔軟に受け止め、活動につなげること。参加者の立場に立って活動を進めること	①
	○活動について、まず地域住民の4割の認知度を目指すこと	①
	○活動のPRを効果的に行うこと(イベントや情報誌、チラシの活用等)	①
	○情報に敏感であること(転入者や、リタイアした人の情報等)	①
④うまく活動が継続している理由、秘訣	○参加者にとって、活動の効果が明確に見えること	②
	○参加者の声に耳を傾けること	②
	○参加者の可能性を考慮し、活動の広がりを視野に入れること	②
⑤活動継続にあたって自慢できること	○参加者の自主性、連携等があること	②
	○活動に自由さがあること	②
	○自分の住む地域に対する想いがあること	②
⑧活動が軌道に乗ったターニングポイント	○参加者の希望に応えられる体制があること	①
	○活動の焦点を絞り始めること	②
	○原点へ立ち返ること	
	○周囲の協力を得ること	



	項目	キーワード
① 発掘	問題意識	○地域の問題に直面したこと・現状を見直す機会があったこと
		○地域のニーズを把握すること
	仲間づくり	○声をあげて中心となる仲間をつくること(一人では難しい)
		○地域のネットワークを活用すること
		○情報に敏感であること(転入者や、リタイアした人の情報等)
受け入れ体制	○参加がしやすくなるきっかけを仕掛けること	
	○参加者の主体性や気持ちを柔軟に受け止め、活動につなげること。参加者の立場に立って活動を進めること	
情報発信	○参加者の希望に応えられる体制があること	
	○活動について、まず地域住民の4割の認知度を目指すこと	
② 育成	やりがい	○活動のPRを効果的に行うこと(イベントや情報誌、チラシの活用等)
		○参加者にとって、活動の効果が明確に見えること
	参加者に目を向ける	○参加者の声に耳を傾けること
		○参加者の可能性を考慮し、活動の広がりを視野に入れること
	参加者の自由度	○自分の住む地域に対する想いがあること
		○参加者の自主性、連携等があること
	運営	○活動に自由さがあること
活動の方向性の再確認	○継続して人が集まり、活動をしていくこと	
	○活動の焦点を絞り始めること	
	○原点へ立ち返ること	
	○周囲の協力を得ること	

※詳細は資料4参照

3 成果物イメージ

(1) リーフレット

- ・主な対象者：地域福祉保健活動者
- ・A3サイズ両面見開き
- ・「2 幅広い人材を発掘・育成するための視点からのキーワードの抽出」で分類したキーワードを基に、幅広い人材を発掘・育成するための様々な具体的な手法やヒントについて検討し、項目ごとにポイントを絞って掲載します。

(2) 冊子

- ・主な対象者：支援者(地域ケアプラザ、区社会福祉協議会、区民活動支援センター、区役所等)及び地域福祉保健活動者
- ・A4サイズ
- ・ヒアリング項目ごとの回答やキーワード等、ヒント集を作成するまでの経緯を把握できる内容と、幅広い人材を発掘・育成するための様々な具体的な手法やヒントについての詳細を掲載します。

4 今後のスケジュール

項目	時期	内容
第2回分科会	12月2日	・収集した事例の整理、検証 ・幅広い人材を発掘・育成するための具体的な手法の検討
ヒント集(案)作成	12月～2月	・幅広い人材を発掘・育成するための具体的な手法の取りまとめ～ヒント集(案)作成～
第3回分科会	2月	・ヒント集(案)の検討、ヒント集の活用に向けて
ヒント集作成	2～3月	・ヒント集作成
最終報告	3月	・第13回市計画策定・推進委員会 ※ヒント集確定

幅広い人材を発掘・育成するためのヒント(中間案) 資料4

項目	キーワード	具体的手法・ヒント	委員自由記入欄 ※網掛け箇所に記入してください	
発掘	問題意識	○地域の問題に直面したこと、現状を見直す機会があったこと	<ul style="list-style-type: none"> ◆困ったことがあったときこそ、解決に向けて知恵を出し合う。 ◆アンケートを実施し、地域の生の声を聴いてみる。そこに課題も、課題解決に向けたヒントもある。 	
		○地域のニーズを把握すること	<ul style="list-style-type: none"> ◆地域や近所で話題となっていることに興味を持つ。 ◆近所の人とのあいさつや立ち話を大切にする。 ◆自治会町内会の広報誌、回覧板、掲示板、広報よこはま区版を眺めてみる。 ◆地域ケアプラザ、ボランティアセンター、区民活動センター、地区センター等を訪ねたり電話をして、ホットな情報を仕入れる、あるいは逆に情報を提供する。 ◆インターネット等を通じて、自ら情報を得る。 	
	仲間づくり	○声をあげて中心となる仲間をつくること(一人では難しい)	<ul style="list-style-type: none"> ◆つながりのある仲間が集まって、本音で話し合いをする(飲み屋で本音で語り合うことも大切。) ◆何かに共感で来る人で仲間をつくる。 ◆「何かやろう!」と周りに声をかければ、何人かは賛同してくれる。 ◆妻が夫に地域デビューのきっかけをつくってあげる。 ◆地域ケアプラザ、ボランティアセンター、区民活動センター、地区センター等に相談する。 ◆気軽に誰でも参加しやすいイベント(お祭り等)を、みんなで協力して開催する。難しいことは考えず、楽しくやっていくことで、お互いの理解が深まっていく。 ◆自分から何かやろうという人は必ずしも多くはないため、仲間を増やすことが大切。5人くらい集まれば、10人、20人と参加者の輪が広がっていく。 	
		○地域のネットワークを活用すること	<ul style="list-style-type: none"> ◆民生委員や体育指導員等の地域のキーパーソンにそれとなく相談する中で、参加者を増やしていく。 ◆口コミや様々な人の輪により、顔が見える関係を通じて参加者を増やしていく。 	
		○情報に敏感であること(転入者や、リタイアした人の情報等)	<ul style="list-style-type: none"> ◆何かをやりたいと考えている人がいるといった情報に敏感になり、その人に声をかける。 ◆地域ケアプラザ、ボランティアセンター、区民活動センター、地区センター等で情報を入手する。 	

幅広い人材を発掘・育成するためのヒント(中間案) 資料4

項目	キーワード	具体的手法・ヒント	委員自由記入欄 ※網掛け箇所に記入してください
発掘	○参加がしやすくなるきっかけを仕掛けること	<ul style="list-style-type: none"> ◆何かあったときにはみんなで支え、「仲間がいる」という実感を持ってもらい、不安を解消してあげる。 ◆新たに参加しようと思っている方をあたたかく迎え入れ、不安を取り除いた上で活動に参加してもらえようにする(ウエルカムパーティ実施等)。 ◆会の名前を親しみやすいものとする。 ◆参加したいという人に、どんなことができるか、得意分野は何か等聞いておく。 ◆参加者の主体性を大切にする ◆参加者やる気に頼るだけではなく、やる気を引き出すまたは高めるような工夫をしていく。 ◆活動にあたって心がけるポイントをまとめたもの(パンフレット)等を渡して説明し、参加者の負担感を軽減する。 	
	受け入れ体制 ○参加者の主体性や気持ちを柔軟に受け止め、活動につなげることで参加者の立場に立って活動を進めること	<ul style="list-style-type: none"> ◆実際に活動を見てもらい、参加してみようという感じが読み取れたときに声をかけるように心掛ける(参加の強制にならないように、あまり先走り過ぎないように心掛ける。) ◆気持ちを柔軟に受け止めながら、参加につなげていく過程を大切にする。 ◆参加するにあたってのハードルが高くないように心掛ける。 ◆定例会等の話合いの場を持ち、参加者の悩みや意見を聞き、活動に反映させる体制を作る。 ◆参加者の持つ能力を引き出し、活用してもらうように働きかける(やりがいにもつながる。) ◆参加者同士、もしくは参加を通じて知り合った人とのつながりができるようにする。 	
	○参加者の希望に応えられる体制があること	<ul style="list-style-type: none"> ◆参加者が、自分の都合や興味、関心に合わせ、特技や経験等を活かすことができるように、柔軟な受入に努める(そのことが活動参加継続につながるとともに、場合によっては、他の活動参加にもつながっていく。) ◆できることについて登録してもらい、その意向を尊重しながら活動に参加してもらう。 ◆誰がきたときにでも、「あの人誰?」という目で見ないで、温かく迎える。 ◆場合によっては、サービスを有償化し、活動者に対価を払うことにより、参加者のニーズにも合致することもあ 	
	○活動について、まず地域住民の4割の認知度を指すこと	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民の中の4割程度の人々が活動を認知し始めると、参加率は高くなる。 	
	情報発信 ○活動のPRを効果的に行うこと(イベントや情報誌、チラシの活用等)	<ul style="list-style-type: none"> ◆自治会のニュース等を通じて、逐一活動を報告することで、地域住民からも賛同を得やすくなり、活動もしやすくなるとともに、参加者も増えてくる。 ◆口コミや人のつながりでPRすることで、地道ではあるが顔が見える関係を通じて、新たな参加者が増えてくる。 ◆活動を日頃から地域に発信し、その意義を広く知ってもらうように努める。 ◆チラシのポスティングを行う。 	

幅広い人材を発掘・育成するためのヒント(中間案) 資料4

項目	キーワード	具体的手法・ヒント	委員自由記入欄 ※網掛け箇所に記入してください
	やりがい	<ul style="list-style-type: none"> ◆活動に参加することにより、活動の受け手から感謝の気持ちが伝えられ、それが担い手のやりがい(達成感、満足感)につながっていく。 ◆活動を知ってもらう(発表する)機会を設けることによって、それが張り合いになる。 ◆活動が地域で認められたり、感謝の気持ちが伝えられることによって、活動者のモチベーションがあがっていく。 ◆自分の役割、居場所が明確になる。 ◆生活のリズムの一つになる。 	
育成	参加者に目を向ける	<ul style="list-style-type: none"> ◆参加者が、自分の都合や興味、関心に合わせ、特技や経験等を活かすことができるように、柔軟な受入に努める(そのことが活動参加継続につながるとともに、場合によっては、他の活動参加にもつながっていく。)※再掲 ◆参加者の愚痴を聞いてあげる。 ◆ちょっとしたことでも「ありがとう」と感謝の気持ちを伝える。 ◆多数決で決めるよりは、できるかぎりじっくり話し合い、全員一致を目指す。 ◆情報交換の場をつくる。 ◆参加者の自発性を促していくためにも、勉強する場を設けたり、勉強できる場(研修会、講座等)の情報を提供する。 ◆参加者のフローに努める。 ◆頑張る人に負担がかかり過ぎないような工夫に努める。 ◆ときには非協力的な人もいるが、そういった人こそ理解者になる可能性もあり、場合によっては粘り強く話をしていくことも必要。 ◆ボランティア活動をしたいと思っている人が、すぐに活動できるように努める。 ◆役員の任期を終えたときに、別の役割を担ってもらうことで活動の幅が広がる。 	
	参加者の自主性、連携等があること	<ul style="list-style-type: none"> ◆参加にあたって、自発性が尊重されている。 ◆リーダーが存在し、リーダーを支えてくれる人がいる。 ◆悪口が出ない雰囲気大切。 ◆メンバーが「お互い様」の精神で活動している。 ◆参加者の個性を生かす。 	
	活動に自由さがあること	<ul style="list-style-type: none"> ◆会合を行う際には、参加者の都合を考えた日程をフレキシブルに設定する。 ◆参加、活動にある程度の自由さがある。 ◆「○○しなければならぬ」ということはなく、ゆるやかな流れの中で無理なく活動ができるようにしている。 	

幅広い人材を発掘・育成するためのヒント(中間案) 資料4

項目	キーワード	具体的手法・ヒント	委員自由記入欄 ※網掛け箇所に記入してください
育成	運営	<ul style="list-style-type: none"> ◆人、活動といった様々な情報にアンテナをはるとともに、その情報を活用する。 ◆10年後の姿を想像して、既存の福祉サービスではまかないきれいなところを、どのようにサポートしていくか考え、仕組みづくりを考えていく。 ◆頑張りすぎない、無理はしないでのんびり続ける。 ◆完璧を目指すのではなく、やっていながら考えていく。 ◆誰でも参加でき、上下関係がなく、運営の透明性を意識し、情報公開に努めながら活動する。 ◆無償でなくても希望にあったサービスを求める方もおり、有償化することによって、サービスや活動も多様化、活発化する。 ◆地域や周りが理解してくれない、ではなく、理解してもらうためにはどうしたらいいか考え、行動する。 ◆活動資金確保のために、メンバーで知恵を出し合いバザーを実施することで、財源の確保とも一体感が生まれる。 	
	活動の方向性の再確認	<ul style="list-style-type: none"> ◆メンバー間で、随時相談しあうとともに、工夫できるアイデアを出し合う。 ◆困難な状況で投げだすのではなく、問題となっていることを洗い出し、ひとつひとつ地道に解決していく。それを支えていく周りの協力が必要。 ◆原点に立ち返り、あらためて話し合っていく。 ◆長く続けてきた人のノウハウを参考にする。 ◆活動を一時休止した際に、本音で語り合う場をつくり、そのことによって、活動者が共感し支えあえる気持ちが生まれるといった効果が生じる。 ◆活動者のニーズにあった活動ではなくなってきたことにより活動者が減少し始めたとき、活動内容を特定化して本当に活動したい人が集まれるように工夫する。 ◆活動が軌道に乗り始めるのにはある程度時間もかかる。活動が軌道に乗り活動者が増えてきたら、活動をしたかった人が活動できるようしにっていくことが大切。 ◆現在の活動の継続が難しいようであれば、活動をやめたり、新しい形ではじめていくことも必要。 	